

下山 俊三（しもやま・しゅんぞう）

1、プロフィール

小説家。新聞人として活躍の傍ら小説を発表。総合雑誌「月刊東奥」の編集者。「東奥日報」に「5枚小説」「10枚小説」の欄を設け、選者となり県文芸界新人の発掘と育成に貢献。

<生没>

1910(明治43)年11月17日 ~ 1994(平成5)年1月27日

<代表作>

「鶴の巣ごもり」「梅咲きぬ」「いく女覚え書き抄」

<青森との関わり>

弘前市新町生まれ。総合雑誌「月刊東奥」(東奥日報社刊)編集長(昭和21~25年)

2、作家解説

小説家。明治43年弘前市生まれ。本名富吉。弘前商業学校卒業。昭和9年東奥日報社入社。新聞人として活躍。出版文化・学芸・調査各部長。また論説委員、記事審査委員、仙台・弘前・大阪各支社長を歴任する。傍ら創作の筆をとり「毎日大衆文芸」「講談クラブ」等の懸賞小説に応募、入選、奨励賞を受けている。昭和21年総合雑誌「月刊東奥」(東奥日報社刊)の編集長(昭和21年~25年)をつとめる。「月刊東奥」(昭和14年創刊、昭和25年廃刊。通算132号)には東京で活動の秋田雨雀、石坂洋次郎、北畠八穂、太宰治ら多く文学者が寄稿しているが郷土在住作家たちの作品発表の場でもあり、彼はその最後の編集長であった。昭和20年終戦を機に東奥日報社では「5枚小説」の募集を開始。これが発展的に解消し、昭和25年に「10枚小説」欄が創設される。ともにその選者となる。新人の発掘と育成につとめ、県文芸界の層の厚さの構築に大きく貢献している。昭和24年「弘前創作の会」を高木恭造らと主催し、本県における戦後初の同人誌

「無名群」(昭和 28 年3月創刊)発行のきっかけとなる。主な作品に「鶴の巣ごもり」(昭和 16 年「月刊東奥」3巻5号)「女兵」(昭和 17 年「月刊東奥」4巻1号)「梅咲きぬ」(昭和 25 年「月刊東奥」12 巻1号)「いく女覚え書き抄」(昭和 50 年「無名群」44 号)ラジオドラマ「星の溜息」(昭和 28 年「県政のあゆみ」)等がある。

3、資料紹介

○「梅咲きぬ」

雑誌

1950(昭和 25)年1月1日

250mm×188mm

昭和 25 年「月刊東奥」(12 巻1号)発表の短編小説。母一人子一人、光雄は学窓から出征し戦死する。恋人順子との間に子ができている。母と子、嫁と孫をめぐるしみじみとした交流が、梅の咲く季節を背景にたたかき描かれた佳編。センテンスが短く水々しい。